

# 第74回 近畿地区卒業設計コンクール応募作品一覧

令和2年5月14日  
日本建築学会近畿支部

## 《短大・高专・専修学校の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	四条 山鉦ギャラリー(仮)	田中 将真	京都建築専門学校 建築科二部	3
2	PLUG-IN	クン ワイ ミン	大阪工業技術専門学校 インテリアデザイン学科	6
3	<u>いなっ子ステイ ～里山を感じるための小さな村～</u>	山崎 なずな	明石工業高等専門学校 建築学科	6
4	ちょい足し 一点と点を線にする浜街道復興計画	上森 彩加	修成建設専門学校 建築学科	10
5	FROM MATERIAL TO SPACE	MARAL BAYARAA (マラル バヤラ)	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	35
6	商店街キャンパス	前田 龍聖	中央工学校OSAKA 建築CGデザイン科	4
7	緑の中の図書館 ～木々に埋もれて～	葉山 侑熙	大阪工業技術専門学校 建築学科	2
8	<u>Shiiba</u>	山中 美里	京都建築大学校 建築学科	7
9	風が吹いている	村上 奏	京都建築専門学校 建築科二部	3
10	木製の椅子制作を通して継手・仕口を考える	竹中 友基	大阪工業技術専門学校 インテリアデザイン学科	15
11	<u>セリ抛り所～漁業と育む生活～</u>	西川 舞香	明石工業高等専門学校 建築学科	8
12	ARTIFICIAL 人造自然	ジェシカ・ン・ユ エ・テン	修成建設専門学校 建築学科	10
13	私が求める家づくりの価値	若狭 龍成	大阪工業技術専門学校 建築設計学科	48
14	TIME SLIT 堺市古墳博物館	窪田 昇馬	京都建築大学校 建築学科	4

(受付順) 以上14点<No. 欄に○印のものは入選作品>

## 《工業高校建築科の部》

No.	作品名	学生氏名	所属	図面枚数
1	幼稚園	小森 友優香	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	4
2	<u>わ 『会話』を軸として『人とのつながりの輪』 を広めていくシェアハウス・ゲストハウス</u>	甲斐 清楓	大阪市立工芸高等学校 建築デザイン科	4
3	図書館	神山 響	奈良県立奈良朱雀高等学校 建築工学科	9

(受付順) 以上3点<No. 欄に○印のものは入選作品>

日本建築学会近畿支部  
令和元年度近畿地区短大・高専・専修学校並びに工業高校  
卒業設計コンクール（第74回）審査報告

審査員長 柳沢 究

令和2年5月14日（木） 審査会場：Web会議システムを利用

審査員長（互選） 柳沢 究  
審査員（50音順） 栗山 尚子・中西ひろむ・橋寺 知子・福原 和則・増岡 亮・安福 健祐  
応募作品 短大・高専・専修学校の部14点、工業高校の部3点（別紙参照）

### 審査経過と審査講評

今年度の審査会は、新型コロナウイルスによる緊急事態宣言下で開催されたため、応募作品をPDF化したデータを事前に審査員に配布し、各審査員が全作品を入念に確認した上で、ビデオ会議システムを用いたオンラインでの審査会を行った。審査会当日は審査員7名全員が出席であった。審査を始めるにあたり、はじめにコンクールの主旨と審査に関する内規、前年度の実績と本年度の応募状況を確認した後、互選により審査員長を選出した。

本年度の応募作品数は、「短大・高専・専修学校の部」14作品（昨年度12作品）、「工業高校の部」3作品（昨年度8作品）であったため、入選作品として、「短大・高専・専修学校の部」は内規の上限である3作品、「工業高校の部」は1作品を選ぶこととした。はじめに、各審査員が優れていると評価する作品を「短大・高専・専修学校の部」から3作品、「工業高校の部」から1作品、それぞれ選んで投票し、その結果をふまえて全員で審議を行い、入選作品を選出した。

投票の結果、「短大・高専・専修学校の部」では、No. 8およびNo. 11の2作品が満票の7票を得た。いずれもテーマの設定やコンセプト、設計の完成度、図面表現等のレベルが総合的に高く、文句なく入選にふさわしいと審査員の意見が一致した。他に得票のあった作品は、No. 3が3票、No. 2が2票、No. 10とNo. 14が1票であった。これら4作品を入選候補として議論を行った。特にNo. 2とNo. 3の評価については、審査員間で意見が分かれたため議論に時間をかけた。最終的に、図面表現の密度や設計の完成度の点からNo. 3を入選とした。入選作品については各作品の講評に譲りたい。No. 2は、全体的な完成度が入選作に及ばず、惜しくも選外となったが、歩道上の柵に取り付ける小さな装置により都市のパブリックスペースをハックするという意欲的な提案である点が高く評価された。No. 10は、仕口・継手の技法をテーマに設計・製作まで一貫してとりくんだ姿勢が注目された。研究・実践をベースにより積極的なデザインの提案に踏み込んでほしかった。No. 14は、古墳を象ったストレートな表現やダイナミックな内部空間が魅力的であるが、提案の中心であるスリットがシルエットの表現に留まっている点に不満が残る評価となった。

「工業高校の部」では、No. 2が5票、No. 1が2票を得た。票数には差がついたものの各審査員の評価は僅差であったことから、そもそも入選作を選定するかどうかも含め、議論を行った。結果として、様々なコンセプトのシェアハウスという難易度の高い問題設定に対し、密度の高い設計によって答えた点を評価し、No. 2を入選とすることとした。No. 1は、中庭を囲むダイナミックな空間構成や丁寧な図面表現は評価されたものの、作品としての完成度

や提案性の点で上位作品に及ばないと判断された。なお、応募数が大きく減じたことについては、その背景について今後の動向を注視する必要があると思われる。

全体として見れば力作が多く、作品としての完成度が入選作に及ばず得票の無かった作品の中にも、個々の問題意識や着眼点、丁寧なデザイン等においては目をみはるものがあった。設計以前の入念なリサーチを行った作品もあり、作品に込められた想いに甲乙はつけがたいにしても、やはりそのような作品の提案には説得的な力が宿る。個人的に印象的であったのは、従来の卒業設計に多い、プログラムとそれを建築化した施設建築の提案ではなく、建築未満の家具やプロダクトを、自らが実際に製作した作品が複数見られたことである。新しい大規模な建築の実現を想像しにくい社会状況の中、よりリアリティのある個人の経験や体感を重視する動きとして興味深い。

(柳沢)

### いなっ子ステイ～里山を感じるための小さな村～

山崎 なずな君 (明石工業高等専門学校)

子どもが里山暮らしを体験する施設の提案である。兵庫県の小学5年生が体験する自然学校は、5日間宿泊しながら自然を体験するプログラムだが、実際には自由にのびのび、とはいかない。そのプログラムを猪名川の農業と関連づけ、地元の人たちと農業体験しつつ、自ら考え行動することができるような施設群を計画している。

敷地の選定と提案内容は現実的で、よく練られている。プレゼンテーションも里山の雰囲気を感じさせるトーンで、細部まで統一感があり、丁寧になされている。ただ、それぞれの棟の計画やデザインは少々粗い。短期間とは言え、そこで子どもが起居することを考えると、必要な空間がもう少しありそうだ。平面の多様さに比して、立面が切妻屋根の画一的なデザインに見えてしまうのが惜しい。キーワードになっている「縁側」での活動を、もう一歩具体的に描くと、各棟の計画に深みが増したかもしれない。

(橋寺)

### Shiiba

山中 美里君 (京都建築大学校)

四方を急峻な山に囲まれ日本三大秘境にも数えられる宮崎県椎葉村に、村外との繋がりを促す場が計画されている。具体的には食事、入浴、宿泊をはじめとした観光拠点、村内施設のガイダンス、他の公共施設との連携などが意図されているのだが、特筆すべきはそれらの活動が本計画地内で完結せず村内外のネットワークの中で位置づけられていることだ。その際、村の特質や魅力をひとつひとつ丁寧に掬い上げ、地域の伝統的景観や建築様式に溶け込ませており、計画物のみを主役にするのではない姿勢が伺える。事実、崖地に沿って計画された屋根の連なる風景は、あたかも背後に位置する既存古民家や神社にとりついた下屋のような場となっており、地域一体に美しい風景を生み出している点に好感を持った。また、模型写真やアクソメ図など卓越したプレゼンテーション技量が高く評価されたことも言及すべきだろう。

椎葉村をはじめ過疎化の進む山間地域は課題先進地域とも言える。建築によって過疎を解決することは難しいかもしれないが、それでも建築にできる試みはたくさんある。肩肘張った大仰な計画とは対極的な、丁寧に地域に寄り添った本計画は、作者の誠実で鋭敏な観察眼の賜物だろう。

(中西)

### セリ抛り所 ～漁業と育む生活～

西川 舞香君 (明石工業高等専門学校)

港町として栄え、漁業とともに生活を営んできた明石の街は、近代化とともに漁業との関わりを失った。明石の中心を背にして海に面する明石浦漁協のセリ市場を、人々の抛り所となる「セリ抛り所」とすることで、漁業とかがわってきた明石の街のアイデンティティを見つめなおす提案である。調和のとれた大きな勾配屋根の折り重なりのもとに、水槽、セリ市場、売店、調理スペースが配置される。2階にいぎなう段階的に上昇するスラブは、海に向かう展望デッキに連絡する。外部のスロープには、いかなごを干す棚が組み込まれた。そこからいかだの上で網直しをする風景を望むことで、かつての漁村の風景が蘇える。漁業の営みとビジターの活動を共存させながら折り重さね、多様なシーンが連続して展開するように丁寧に作りこんだ点が評価できる。ユーザーごとの行動やイベント内容まで提案が及ぶ地域への愛情があふれる秀作である。

(福原)

### わ 『会話』を軸として『人とのつながりの輪』を広めていくシェアハウス・ゲストハウス

甲斐 清楓君 (大阪市立工芸高等学校)

テーマをもった8つのシェアハウスと1つのゲストハウスを地域内に分散配置し、シェアハウスの利用者が様々なシェアハウスを利用し、地域内の回遊性を生み出そうとしている。そして、ゲストハウスを、シェアハウス利用者、地域住民、外国人観光客の交流拠点として位置づけ、多様な人々の交流のきっかけを生むことを狙った作品である。現代のシェアハウスの隆盛を敏感にとらえ、かつ、地域との関わりも考慮しており、建築物単体に留まらない視野の広さと数多くの建築物を積極的に設計した意欲を高く評価した。

よって、各建築物と地域の配置関係が本作品では重要であるが、各建築物の地域内の立地場所が明示されていない点が残念である。そして、本作品では、各シェアハウスの個室数が少なく、1つのシェアハウス内の個室のデザインが均一である。近年、シェアハウスの個室数は数少ないものから数十の多いものまで存在し、個室とシェアスペースの空間計画も多様化していることから、均一なデザインから脱却すれば、シェアハウスでの空間体験を豊かにできる。そして、パースや模型等の表現を用いれば、作品の立体的な魅力を伝えることができ、さらに作品の完成度と説得力が増すであろう。

(栗山)